# 季刊　連句　第37号

平成四年六月一日発行

# 季刊連句　第37号　目　次


俳諧連歌三千巻（南柏雑記　35）…… 1

平成三年の連句界 …… 東　明雅 … 2

歌仙四巻　春炬燵……（東　明雅・草間時彦・平井照敏）…… 4
　春深し……（　捌　東　明雅　）
　弥生尽……（　捌　原田千町　）
　海　棠……（坂本孝子・式田和子・大窪瑞枝）

二十韻　夜長　（捌・文　秋元正江）…… 8

亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行　第四十一回猫蓑会 …… 10
　第一部　正式俳諧興行　㈠役割　㈡次第
　　二十韻　藤祭　捌　式田和子
　　文　冠　亀戸天神社奉納正式俳諧　式田和子
　第二部　二十韻　八巻　捌　東　明雅・倉本路子・桑原美津
　　下坂元子・下鉢清子・中川　哲
　　原田千町・東　郁子
　　文　文台袖　副島久美子
　　初習い「配硯役」顚末　岩井啓子

蓑虫付勝練習二十韻 …… 東　明雅 … 18

芦丈翁俳諧聞書（Ⅳ）…… 20

二十韻五巻 …… 24
　捌　式田和子・中川　哲・原田千町
　　鈴木　茂・田村満子

手賀沼連句会 …… 26
　手賀沼張行記
　二十韻　八巻　捌　秋元正江・市野沢弘子・内田麻子
　　式田和子・下鉢清子・鈴木千恵子
　　中島啓世・福井隆秀

雁帛往来 …… 29

新刊紹介 …… 25


表紙（尾白鷲）　宮崎龍火子

# 俳諧連歌三千巻

## 南柏雑記 35

雅

先師芦丈翁は、生涯三千巻の俳諧を捌かれたという。何しろ、明治七年（一八七四）に生まれ、昭和四十三年（一九六八）に逝去されるまで、九十五年に及ぶ生涯のうち、既に二十一歳で馬場凌冬師の門に入って学ばれ、その連句歴だけでも、七十余年に及ぶのであるから、それはむしろ当然であろう。先師の歿后三年に出版した「芋日記」の中で、故清水瓢左師はこのことにふれ、これは決して水増しの三千巻ではなく、むしろ割引の三千巻である事を実証しておられる。

昔の宗匠の中でも、たとえば昭和六年（一九三一）に六十一歳で歿した西尾其桃は、三千堂と号したが、これも三千巻首尾を誇っての事であろう。贄川他石（昭和十年一九三五歿）に至っては、生涯の作品七千巻というが、これは恐らく、前人未踏、空前絶後の大記録であるに違いない。

清水先生も、生涯三千巻達成に野心をもやしておられたようである。昭和四十七年（一九七二）に出された先生の「この一年」という連句作品集には、その前年一年間に各地の俳友と対座、または文音によって風交された所産として、百二十余巻が収められている。この当時、先生は作品二千巻と称しておられ、そのあと、昭和六十三年（一九八八）まで、十五・六年を矍鑠として生きられたのであるから、すくなく見積っても三千巻は優にオーバーしておられるであろう。ともかく、清水先生ほど連句のお好きな方を私は知らない。面を合はせるとすぐ、発句を所望され、付合がはじまる。それは家の中だろうが、外だろうが所かまわずであった。あれは昭和何年の事だったか。伊賀の上野で俳文学会が開催され、ちょうど松本に来ておられた先生と同行したわけであるが、途中、列車の中、また旅館ではさらに人を集めて興行される。伊賀上野から名古屋に出た時などは、満員電車の中で、お互いに吊皮にぶら下りながら、付句をして行ったのであった。私も決して、嫌いではないが、この瓢左先生の根の好さにはつくづく脱帽したものである。

現在、私は猫蓑会で旅をする時、車内の席が定まるや否や、小短冊を取り出して、二十韻を強要する癖があって、多くの顰蹙を買っているが、これはまさに瓢左先生の影響である。

私は、生来の疎漏、折角、巻き上げたものを正確には記録していない。ただ、昭和三十六年に連句を始め、五十五年までの松本時代二十年間に凡そ四百巻、そして五十六年から今日まで柏の十年間は機会が多いので凡そ六百巻、計千巻には達していると思うが、どうであろうか。

# 平成三年の連句界

東　明雅

この年、第六回国民文化祭ちば91連句大会が開催され、前年に劣らぬ盛り上りを見せた。この国民文化祭を通じて、連句が今まで不毛であった地方にまで広まって行く。その外、各種の行事や出版物も、前年に続き賑やかであった。考えてみればこの年は子規の俳諧革新からちょうど百年目にあたり、彼によって一旦は潰滅された俳諧（連句）が、百年にして漸くその呪縛から解き放された感のする充実した年であった。

## 一、行事

(1)六月十五日　連句協会第十回全国大会が芝の増上寺会館で開催された。百二十余名参加、二十五席。

(2)九月十四日　第三回全国連句新庄大会が、新庄市教育委員会・北陽社の主催で、同市市民プラザにおいて開催された。参加者七十余名、十二席。

(3)十一月二十三日　第六回国民文化祭ちば91連句大会は、千葉市幕張メッセで開催。全国からの募吟八百五十一巻、参加者三百余名、四十九席の盛会であった。

(4)その他

ⓐ一月十五日　現代連句シンポジウムが飯田橋のホテルグランドパレスで開催された。八十余名参集。パネラー・ゲストと聴衆の間に熱心な討論が行なわれた。なお、この第二回は七月二十七・二十八両日、君津市の山荘で行なわれた。

ⓑ五月二十三日　故清水瓢左翁追悼の第三回青時雨忌が深川の芭蕉記念館で挙行され、多数の参加者があった。

ⓒ六月二十二日・二十四日、「日独俳句・連句交流シンポジウム」が、ケルンとフランクフルトで開催。宇咲冬男氏の講演と、フランクフルトでは実作もあった。

ⓓ七月二十一日　第五回連句フェスタ宗祇水が、郡上八幡大乗寺で挙行された。

ⓔ十月二十七日　第十九回俳諧時雨忌が飯田橋の家の光会館で開催された。五席。

## 二、出版物

①作品集　東明雅著「新炭俵」（二月二十五日刊、角川書店）、猫蓑会編「猫蓑作品集Ⅰ」（三月吉日刊）、内田麻子著「房連庵の連句」（三月十六日刊、むなぐるま草紙社）、窪田薫著「１９９０年の獅子料理」（六月六日刊、俳諧寺芭蕉舎）、貫井爽水著「句集爽水」（六月八日刊、卯辰山文庫）、くのいち連句会第七集「六歌仙花のさきがけ」（八月一日刊、くのいち連句会）、小松崎爽青著「爽青連句集」（十月三十日刊、永田書房）など、前年にくらべて、その数はややすくなかったけれども、それだけに粒ぞろいであった。

②連句論書・入門書　大岡信著「連詩の愉しみ」（一月二十一日刊、岩波新書）これは題名の示す通り、連句ではない新しい連詩というものの試みであるから、ここに引用するのは不当であるかも知れないが、もともとは連句から出たもので、連句の何たるかを考える上に参考になり、また、外国人に連句を教える場合（一のⓒ参照）、その可能性を示唆するものでもあるので、敢てここに掲げた。入門書としては暉峻康隆・宇咲冬男共著の「連句のすすめ」（四月二十日刊、桐原書店）がある。両者の文音歌仙五巻の外、テレビ放映の三吟歌仙を解説している。

③連句年鑑・連句協会会報、年鑑の平成三年版は九月二十日刊。会報は隔月配布され、連句界の行事、作品を報道。

④主要連句グループ発行誌、連句研究会「連句研究」は十二月号をもって百号に達した。創刊から十数年に及ぶ阿片瓢郎氏の努力に敬意を表し、尚、今後一層の発展・充実を期待する。岡本春人「俳諧接心」は実に五百二十五号、東明雅「季刊連句」は三十五号である。大林杣平「都心連句」・柴崎正寿郎「句と連句」も健在、真鍋呉夫「水分」は八月第二号を出した。橋閒石「白燕」、秋山正明「丹想」その他、國島十雨「獅子吼」、宇田零雨「草莖」、宇咲冬男「あした」、小松崎爽青「かびれ」、鍵和田秞子「未来図」などにも、毎月、連句作品、あるいは論説が掲載されている。

綜合俳誌「俳句研究」は五月号に「現代連句の効用」と題する特集、その他、一月号・七月号・八月号・十月号・十一月号にも、それぞれ連句の記事が見られる。さらに、「江古田文学」（第十九号）は「現代の連句」を特集した。

## 三、消息

佳菊庵森月鼠氏が三月逝去された。九十四歳。深悼。

新庄市北陽社では五月、金風軒苫舟（金沢兼雄）・一芯亭喜楽（熊谷喜一）・琴風軒茶香（山崎栄一）・露月庵杏風（村松幸栄）・秋光園葛子（浅沼栄太郎）の五宗匠が、また、猫蓑会では十二月、羅浮亭正江（秋元正江）・行々子庵平朗（杉江平朗）・桃径庵和子（式田和子）の三宗匠が、それぞれ立机された。

# 歌仙四巻

## 三吟歌仙　春炬燵

安曇野は昏れてむらさき春炬燵　明雅
　山葵田ひとつ谿の奥処に　時彦
別れ霜童女の頬のふくらみて　照敏
　ピアノのあとはヨガの練習　雅
買ひに行く月見の宵の団子など　彦
　新走り酌みとろりと居たり　敏

琴平（ウ）の金比羅様の大祭　雅
　安くしとくよ駕籠を召しませ　彦
右腕に刺青の仮名ふとのぞく　敏
　べんがら染めのソバージュの髪　雅
結局は堕してしまふつもりなり　彦
　しぶきかかれる磯の這ひ松　敏
中天に月かすかなり卯浪あと　雅
　浴衣縫ひたて下駄も新調　彦
陸橋の上で端唄の稽古して　敏
　寺の境内ゴルフ教室　雅
昼過は風の出で来し花吹雪　彦
　木馬道にて雉の声聞く　敏

孕（ナオ）み鹿母子離れて暮せりと　敏
　立机式とて集ふ人々　彦
三百の光陰古りし無名庵　雅
　玉突事故のつづく昨今　敏
パソコンに予防注射をすることも　彦
　嘘字宛字の孫の恋文　雅
雪しづく涙のしづく混りあひ　敏
　榾火を守る婆を愛して　彦
あの世からほういほういと背後霊　雅
　痩せる杉の木研ぎ出しの月　敏
庄屋さま朝寝朝酒蕗好きで　彦
　矢張り目黒に限る秋刀魚は　雅

山廬忌（ナウ）の瀧のこだまにこもりけり　敏
　ミレー見に行くバスを連ねて　彦
マジョリカの陶器に淡き物の翳　雅
　虹の羽音のいつまでもあり　彦
花の浪たかぶる思ひにて歩む　敏
　夢も現も朧朧に　雅

平成四年三月二十三日
於　俳句文学館　首尾
連衆　東　明雅（出句順）
草間時彦
平井照敏

# 春深し

東　明雅　捌

深川芭蕉庵

飛びこめぬ石の蛙や春深し　明雅
　池にたゆたふ山吹の色　徒司
白子干米酢たっぷりふりかけて　あかり
　濡れた手で押す書留の印　利昭
ファミコンに夢中の児等を照らす月　弘子
　刻々迫る台風（タイフーン）なり　千恵子

牧（ウ）閉し終へしみじみと茶碗酒　水壷
　パンチパーマでアメカジ★の婿　和久
ねるとんのパーティ今日もはしごして　啓子
　ららかけましょか神に願ひを　隆秀
北方の領土二島か四島か　郁子
　蟹の鋏に後ずさる猫　司
玉葱を刻んでは泣く月の宵　昭
　手癖直らぬいかさまの賽　壷
紋次郎銜へ楊枝の長いこと　り
　いちもくさんに随徳寺村　壷
花の山上千本は雲の中　久
　夢の如くに囀りに満ち　郁

「你好（ナオ）」と「謝々」ですます旅のどか　郁
　こっそり求む不老生薬　啓
大正のモダンボーイは今傘寿　雅
　こころも軽く青い背広で　秀
跳橋の色彩淡き日本調（ジャポニズム）　久
　海へ向って川は流れる　司
小田急の終電寒く二人連れ　昭
　キスの途中でそっと目をあく　久
少しだけ伸びた鼻毛も愛しいの　恵
　赤のまんまはままごとの飯　弘
月高く単身赴任父帰る　啓
　焜炉にて焼く秋刀魚ぼうぼう　秀

駅伝（ナウ）に出るこの足をさすりつつ　り
　のっぺらぼうも声を嗄らして　恵
ぶつぶつと恍惚の人徘徊す　壷
　万愚節から募る老眼　郁
セビリアのパビリオンにも花ふぶき　啓
　陽炎燃ゆる街の角々　弘
　平成四年五月三日　於　深川芭蕉記念館

★アメリカンカジュアルウェアのこと

# 弥生尽

この奥の白鳳仏や弥生尽　千町
百千鳥聴き坐る方丈　元子
花トンネル抜ければ月の淡くして　健悟
ピエロが配るティッシュペーパー　瑞枝
蒸し麺麭のやうなほっぺの嬰あやす　澄子
橋の彼方に蒼む夏峰　悟

爬竜船（ウ）の櫂を揃へて漕ぎ出でぬ　元
蝶々夫人佇める窓　枝
デュエットの息柔らかく耳に触れ　同
噂ぢゃわたし既に結婚　澄
染め付けの小鉢によそふ菊膾　枝
鬼の捨て子のちちと鳴く月　元
無頼派のヒロポンを打ち長き夜　澄
革の表紙の詩集手に古る　悟
二枚貝螺旋の貝に角の貝　澄
損益決算差っ引いて零　枝
よきことのなにかあれかし神迎へ　澄
背戸の狐とちらと目が合ふ　元

## 原田千町　捌

ワイナリー（ナオ）利酒の樽囲むらん　枝
有線放送爽やかな声　悟
月翳の荒野果てなき高速路　枝
ホモサピエンス地球蝕む　町
試験管ベビー次々誕生す　悟
兄とは知らず永遠の恋人　枝
小桂の伏籠にふはと架かりゐて　同
慌てて戻るふいの夕立　悟
ブルーガイド一冊入れる旅鞄　町
BGMのワルツかすかに　元
元教師始めて髪を染めし春　悟
苧環たむけ父母の墓　枝

岬（ナウ）より鳶ゆるりと東風に乗り　悟
飛行機雲の描く広告　枝
狂言の真似なぞもする躁のころ　澄
少し訛って英語独逸語　元
夢のごと山ふところの帰り花　町
伊勢海老飾る塗りの三宝　澄
平成四年三月二十七日
於　神代植物公園

## 三吟歌仙　海　棠

海棠や媼の紅のたをやかに　孝子
　もてなしに搗く草餅の青　和子
放ち鮎浅瀬の石に影ゆれて　瑞枝
　鋭き稜線をめざすグループ　孝子
月中天ファックスを待つ静寂なり　和子
　初めて涼し宿直の窓　瑞枝

神輿(ウ)舁胝叩いて見せる秋祭　孝子
　ちょっとご褒美軽きくちづけ　和子
休講のゼミが恋路のステップワン　瑞枝
　ワイン過しぬよろめけるほど　孝子
独断で戒厳令の大統領　和子
　はだかの子等を散らす警笛　瑞枝
水牛の群れて泉の月砕き　孝子
　夜の焚火に旅のルポ書く　和子
常連の一泊二日貸しビデオ　瑞枝
　外科学会に旧闊を叙し　孝子
折りたたむ花の宴の香包　和子
　春の小袖にぬひとりの紋　瑞枝

下(ナオ)請は下京の路地たびら雪　孝子
　堂々と出す飯のおかはり　和子
ビザ切れの喚問状も転々と　瑞枝
　血を滲ませしヤクの針痕　孝子
ぼんやりと豊志賀さんは蚊帳のうち　和子
　あの世を頼み契る短夜　瑞枝
喪に籠る心の隙を口説く奴　孝子
　馬糞つかみと人に謗られ　和子
高層のビルのパチオの甃　瑞枝
　パイプオルガン月に響かふ　孝子
軸装の御製を飾り文化の日　和子
　車椅子押し菊花展見る　瑞枝

人生(ナリ)は身の丈に合ふ荷を負ひて　孝子
　フェンスの向ふテニス軽やか　和子
当番で気象クラブのグラフ描く　瑞枝
　小じっかりして続く円高　孝子
薪能炎は花を焦がすまで　瑞枝
　遍路結願上々の酒　和子

平成四年四月八日　首尾

於　桃径庵

連衆　坂本孝子（出句順）
　　式田和子
　　大窪瑞枝

## 二十韻　夜長

秋元正江捌・文

肝臓をだましつつ酌む夜長かな　明雅
芋名月のてびねりの鉢　正江
鳥の声岬のはなを渡るらん　達子
ボーイスカウトちょっと休憩　和子
パフォーマンス・パントマイムの帽廻す　千町
彼より先に犬と気が合ひ　庸子
均等法嫁しては夫を従はせ　淳子
壷坂寺のきつい坂道　澄子
まくなぎのまとひつきたるまひるなか　杉亭
びっくり水をかけて冷麺　清子
ごっつんとぶつかる長押のっぽの子　あかり
落合選手夢の三億　美津
庭広しゆらりと泳ぐ人面魚　雅代
氷の閨に誘ひ込まるる　文子
亡き女を恋ひつつ仰ぐ寒の月　安子
組鐘ひびく教会の塔　啓世
世界中どこもかしこも唯「行った」　志げ子
縁に坐れば呆けそうな春　利子
風吹きて谷へ流るる花ふぶき　千雪
小さき村にかかる初虹　淑子

平成三年十月九日　起首
平成四年二月二十六日　満尾
於　新宿朝日カルチャー四十八階教室

白菊や隣の家も老夫婦
硝子戸を露流れをり十三夜
肝臓をだましつつ酌む夜長かな　三秋　場

客発句、脇亭主に従い、明雅先生にお願いして発句を三句頂いた。その中から俳味溢るる〝肝臓を〟を頂く。

脇は発句が三秋なので仲秋の芋名月で季を定め打添付。

3　鳥の声岬のはなを渡るらん　三秋　場

発句、脇が内の景なので第三は先ず聴覚から入って促されるように視線を移動させるような大きな景で転した。

4　ボーイスカウトちょっと休憩　他

岬の風景にボーイスカウトを点在させ、前句の岬、海、ボーイスカウトの色彩の動きが鮮やか休憩でストップした。

1　パフォーマンス・パントマイムの帽廻す　他

裏に入って折立は前句を市街地に見立替えして、大道芸人の演技が終って帽子を廻している楽しい風景

2　彼より先に犬と気が合ひ　自

パントマイムの人混みには珍しい種類の犬も見物、ふさふさしている毛並を撫でているうちに彼女と意気投合。つまり彼の愛犬と彼女の出会いが先で、犬にひかれた彼女は次に飼主である彼と恋におちたのである。フランス映画の一こまのようだ。

3　均等法嫁しては夫を従はせ　自他

やさしいと思った彼女も現実の結婚生活では、均等法など無くても尻の下のつもりだったのに、更にまた。

4　壷坂寺のきつい坂道　場

「三つ違いの兄さんと…」で知られる『壷阪霊験記』、浪花節へ妻は夫をいたわりつ、夫は妻を慕いつつ…、の壷阪寺、正しくは南法華寺の坂道を出して前句に皮肉充分。

5　まくなぎのまとひつきたるまひるなか　三夏　自

まくなぎは糠蚊、めまといとも云い揺蚊の一種、一句を平仮名の八一調で、きつい坂道でのまくなぎ襲来を演出。

6　びっくり水をかけて冷麺　三夏　自

前句のまくなぎを厨にもってきて昼食の仕度の冷麺をゆでるびっくり水にまくなぎも退散したと思う。

1　ごつっんとぶつかる長押のっぽの子　他

厨に続く居間では栄養に恵まれて育った背の高い子が、長押といういまや古い物に抵抗したかの如くぶつかった。

2　落合選手夢の三億　他

よい体格とすぐれた運動神経は時代が夢の三億をもたらすのである。

3　庭広しゆらりと泳ぐ人面魚　場

前句の三億から付句は豪華に鷹揚になったが人面魚は何かお金の功罪を知っているようだ。

4　氷の閨に誘ひ込まるる　晩冬自他

人面魚は実在するが誘ひ込まるるの妖しい雰囲気に氷の閨は現世かあの世かそれとも心象風景か。

5　亡き女を恋ひつつ仰ぐ寒の月　三冬　自

この月はまさに氷輪、冷たく輝いている。

6　組鐘ひびく教会の鐘　場

折しも教会のカリヨンが嫋嫋と響き供養となるのである。

1　世界中どこもかしこも唯「行った」　他

組鐘から世界漫遊の思い出へ、しかし何処も唯「行った」は忘れられない名言の一句。

2　縁に坐れば呆けそうな春　三春　自

「呆けそうな」で老を危く救っているが、前句をかるく受け春が効いている。

3　風吹きて谷へ流るる花ふぶき　晩春　場

4　小さき村にかかる初虹　晩春　場

花の定座、挙句とも場の句で美しい自然を素直に付けた。

二十韻「夜長」の巻の山場を恋句の2、3、4、3、4、5に前者は破一段で洒落た恋、後者破二段は幻想的な恋句が付いた。3の付句には治定した句の他に次のような多彩な付句が出た。

庭広しゆらりと泳ぐ人面魚
わらはにたもれそちの魂
契りしものの蛇体なりしか
家出女の風邪で居続け
雪心中を人垣に見る
寒の牡丹の精に魅入られ

教室では三十名近い連衆がいっせいに付句を出して、それを黒板に書き一句を選ぶ。一巡のためわくわくするような付句を頂けない辛さがあったが逆にその条件の中で習作を超えるものが巻けたらと思う。出句の付味をじっくり鑑賞して一句に紋りこむということはすごく興奮する作業であった。

# 亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行

## 第四十一回　猫蓑会

第四十一回猫蓑会は四月二十六日(日)、江東区亀戸天神社社務所で、同天神藤祭りの一環として、正式俳諧を興行、奉納し、そのあと、二十韻八巻を首尾した。

第一部　正式俳諧興行　「藤祭」一巻

第二部　二十韻八巻

### (一)　役　割

宗　匠　式田和子
脇宗匠　豊田好敏
副宗匠　内田麻子
執　筆　副島久美子
知　司　仏渕健悟
副知司　雑賀　遊
同　市之沢弘子
座　配　小林千雪
座　見　下鉢清子
花　司　上月淳子
配　硯　若尾よしえ
同　橘　文子
同　岩井啓子

### (二)　次　第

一　席改め
二　席入り
三　配硯
四　献花
五　執筆登場
六　文台捌
七　知司挨拶
八　俳諧興行
九　花前
十　玉串奉献
十一　花の句披露
十二　端作り
十三　吟声
十四　文台返し
十五　作品奉納
十六　知司挨拶
十七　退席

## 二十韻　藤祭

捌・文　式田和子

振り仰ぐ瑞の反橋藤祭　明雅
親猫仔猫眠る店先　杉亭
春炬燵宿題ひろげそのままに　正江
ピーと音してファックスを受け　好敏
月中天鮎解禁の時近し　健悟
白靴似合ふ同齢の女　清子
握られて引き寄せられてもうその気　弘子
トクホンチールじんわりと効く　遊
宰相は会議続きでこっくりこ　麻子
韓国政界ゆれる寒々　淳子
登り窯綿入れの子に声をかけ　雅代
高速脇は缶の山なり　千町
バイロンの口絵を照らす窓に月　達子
別のわたしになったこの秋　志げ子
蜉蝣の如くさらりと服を脱ぎ　澄子
念仏講の回状が来る　一恵
制覇せし七つの海を語る父　哲
オリンピックのメダル大きく　あかり
盃の底に寿花の宴　和子
頬をなでゆく暖かな風　執筆

## 冠　亀戸天神社奉納正式俳諧

**亀戸**天神社の藤祭りに正式俳諧を奉納することは、猫蓑会恒例の行事となりまして、今年で六回目です。当日四月二十六日は快晴の日曜日。ＮＨＫでもこの藤祭りのことが放映された由で、亀戸ゆきのバスは超満員。境内もことのほかの混雑で、会場の社殿に入るのには盛りの藤の花房の間を抜け、反橋を渡るのですが、これがなかなか通れなかったと連衆の頬も紅潮気味でした。

**天神社**殿もお宮詣りのご一家が列をなしていて、日柄は「友引」。そのおはらいの間を縫って奉納関係者一同正式参拝を済ませ、開始を待つ間列席の友人と挨拶を交す余裕も見られました。

**奉納**の正式俳諧は定刻、粛々と開始。花司の芍薬の朱が一きわ鮮かに、止め鋏の音きっかりと響き、執筆久美子さんの紫の袴とよく映えて、端正な文台捌きにほのかな艶の漂うのは猫蓑ならではのことと思います。

**正式俳諧**奉納の日は、まだ道真公が大宰府にご蟄居のときと伺いました。

山わかれ飛びゆく雲のかへり来る影見る時はなほたのまれぬ。（道真公新古今集）

猫蓑会の一巻おなぐさめになりましたでしょうか。どうか連衆一同の俳諧の上達お導き下さいませと玉串奉献させて戴きました。

## 池波に

東　明雅　捌

池波に映ゆる藤波人の波　明雅
うらうらうらと風光る頃　杉亭
連弾の父子のピアノのどやかに　麻子
泰西の詩を口ずさむ我　欣二
夏木立透かして見ゆる夜半の月　亭
脂粉の香匂ふ宵宮　同
誘はれていつも二人の舞妓はん　麻
猫は恐々三味線の皮　亭
成道会棒の痛みに目を覚し　二
宮沢首相のらりくらりと　麻
船長のきつい宰領デパーチャー　二
コロンブスから早五百年　雅
聖家族教会横に旗幾本　亭
物のはづみにそっと子を産む　麻
残る月夫与へて沈みゆく　二
太りじしなる簗の落鮎　同
温め酒ひとりで飲むもまた楽し　麻
ファミコンゲームお得意の爺　亭
朽ちもせぬ忠霊塔に花吹雪　二
春蝉鳴いて山峡の村　麻

## 亀戸の藤

倉本路子　捌

季寄せにもある亀戸の藤やこれ　路子
鳩も客なり豆炒の店　利子
春ショール淡き色糸編みつぎて　正江
遠近レンズ合はぬ焦点　千恵子
明日からは夏断の僧に月斜め　好敏
雷鳴るが恋の始まり　千
ウォータルー・ブリッジで逢ひしひとの夫　江
バーボンよりはやはりスコッチ　敏
小錦を日本たたきに軽く乗せ　利
呼んでも来ないへっついの猫　同
冬の蜂雌蜂だけが生き残る　千
どろどろどろと知盛の霊　敏
スプーンが急に曲って覚める夢　江
どうかなっちゃう深みゆく秋　同
月の中裸形卍に絡みつつ　千
連れ子同士がさんま焼いてる　江
万能の薬は婆の征露丸　敏
携帯電話いつもポケット　千
満開に会ひし果報の花の旅　利
黒潮洗ふ浜のうららか　敏

## 藤のはな

桑原美津捌

亀戸や易らぬものに藤のはな　しげと
　囃子太鼓をのせる正東風　和子
嬰抱いて記念写真ののどらかに　遊
　犬のポーズも決めてやるひと　美津
滝の月燦くやうなしぶき浴び　文子
　喧嘩しながら食べる葛切　と
×一も×二も問はぬ世となりぬ　和
　エレベーターの超々高速　遊
ファックスで「のぞみ」の切符手に入れる　文
　初番付にきったご祝儀　和
下戸ながらこの献酬の河豚汁　と
　やっと間に合ひ枕経読む　和
すっきりと富士を裏から望む窓　遊
　つい惚れた女蟷螂となり　文
この想ひ月へ月へと飛翔して　和
　ショパンの生家露霜の中　遊
頼まれて元将軍は会長に　と
　新刊本の署名闊達　文
花に寝て夢はいろはにちりぬるを　美
　つばくろの来て賑やかな軒　遊

## 瑞垣に

下坂元子捌

瑞垣に藤浪ゆるる日和かな　元子
　春惜しみつつ渡る反橋　志げ子
初諸子襷がけにて炙るらん　雅代
　おはじき遊び姉と妹　ますみ
高層の夕立すぎて月をあげ　美奈子
　ちょっと効きすぎバスのクーラー　代
新任の助教授うなじ青々と　奈
　あの方のもの夢の中では　み
予想屋が本命といふ馬券買ひ　志
　一進一退ブッシュ善戦　奈
凩の吹き消す遠き発破音　代
　座禅組む足疼くあかぎれ　志
旅支度赤きシャツなど詰めこみて　み
　キャンティ注ぎて甘き囁き　志
月ぞ知る火宅の人の嘘まこと　同
　古城の磴のゆがみ冷まじ　代
豊作に村中こぞり上機嫌　代
　海山の幸大皿に盛る　み
花吹雪伊勢路これより西に向き　志
　ゆくてはるかに雲雀飛び立つ　代
　　奈

# 藤の花房

下鉢清子 捌

ひもろぎや藤の花房揺るるかに　清子
　軟東風かへす禰宜の広袖　達子
焼栄螺電子レンジで作りゐて　啓子
　口ずさみみるウクレレの曲　啓世
月涼し久留里くろもじけづる男　同
　三毛猫抱いて焦らすおもはく　よしえ
ホームスティいつの間にやら嫁の座に　同
　水平線に消ゆる船影　世
詩集閉づ梵鐘ひくく渡りゆき　達
　点滴を替へ暖房の中　世
熱燗を酌みて別れし勤務明け　啓
　ごまをすっても主任止まりで　え
株証券郵便局に切り換へた　達
　うなじあえかな年下の母　世
相聞はひとときの夢月細く　啓
　落人料理串の錆鮎　世
そぞろ寒マラソンレース白熱し　達
　ノーベル賞の学長が来る　啓
花の頃誘はれ碌山美術館　世
　刻ゆるやかに雲雀野の畦　え

# 藤祭り

中川哲 捌

藤祭りめでたきことの続きけり　哲
　池の面照らす春の望月　一
三宝柑香を楽しみつ寛がん　恵
　ビデオゲームではしゃぐ兄弟　千雪
出奔の父が好みし兎狩　淑代
　北窓塞ぐ部屋に忍びぬ　健悟
イッセイのパンツスーツをそっと着け　恵
　カリヨン時計正午打つ頃　代
動くとも見えず巨船の進みつつ　悟
　活気づきたる香港商人　雪
扇風機賭場の紫煙をかきまぜて　同
　螻蛄の鳴く声しみじみと聞く　悟
月さやか信濃は鬼の棲める国　恵
　菊の枕もいつかはづされ　代
嫌な奴に抱かれて貰ふ五十万　恵
　教祖ゆったり乗れるリムジン　哲
連休を縁なきわれとひがむひと　悟
　旬のもの佳し酒もまた佳し　雪
上梓せる句集ひもとく花明り　同
　ハミングバード霞む山々　悟
　　代

# 藤が香

原田千町 捌

藤が香や衣冠の神の立ち給ふ　千町
うららうららに続く人波　シズ
ボートレース櫂を揃へて競ふらん　澄子
ぐいと飲み干す酒の身に入む　正敬
再会のふたりを照らす窓の月　弘子
きりぎりす鳴く閨の枕辺　ズ
売るべきか株価下落でハムレット　敬
「出た」と誰かがさては亡霊　澄
登山道病むを庇ひてしんがりに　弘
ラムネサイダー心太あり　同
大男リモコン飛行機無我夢中　敬
絵本を中に頭寄す子等　ズ
こん狐狸にちらとしっぽ見せ　弘
榾火を燃やす月の抱擁　澄
女名の速達が着き痴話喧嘩　敬
もはや晩年初志は夢のみ　町
鳩の群れ追ひ散らし行く石畳　澄
ここら辺りが有耶無耶の関　敬
傾きし一本だけの花盛り　弘
赤青黄色風船を売る　ズ

# 藤の風

東郁子 捌

反橋や四方より寄する藤の風　郁子
人のあはひを縫へる蝶々　あかり
春炬燵色名帖を開きゐて　淳子
回覧版の判取りに立つ　久美子
ギャマンの壷に妖しく月の影　志紅
夏痩せしたねとそっと囁く　八代良子
遊学の果の同棲知らぬ親　淳
邦人ばかりナポリ・ポンペイ　美
酔ひしれて株の値下がり愚痴り合ひ　紅
猫に戒名つけて葬る　淳
木の葉髪ばっさりと切りアデランス　り
ラグビー観戦通ひつめなり　良
この頃は男子厨房流行し　美
心こめつつ菊枕など　淳
書き置きを月の照らして君何処　美
フェンスに揺るる鵙の早贄　良
わんこそば年齢に似合はず健啖に　郁
孫子集まり歌も賑やか　良
神父来て洗礼式の花吹雪　り
夢の如くに霞む山々　紅

# 文台袖

副島久美子

吹く風も心地よく申し分のないお天気に恵まれて、藤祭り天神様奉納の正式俳諧は無事終りました。

お囃子の太鼓の音やあふれんばかりの参詣の人々の賑わいも、ここ天神様の祭壇をしつらえた室内には少しも届かずしんと静まり返った全くの別世界、宗匠様の席入りから始って配硯、献花を滞りなく進行しいよいよ執筆の出番、深呼吸数回、文台に両手を掛けて立ち上り、後は毎日欠かさず一度は行った稽古通り順序を追って進める事が出来ました。文台捌き、下俳諧の読み上げそして句をお付け頂く方達もすらすらとお運び下さり玉串奉奠に続き宗匠様から花の句を頂戴してめでたく吟声に至りました。

今回明雅先生お作の発句がとても発声しやすくて「振り仰ぐ」の「り」の音が上向きに伸びて行くところなど鳴竜ではないのですが、何か会場の四方の壁から響きが返って来る様な感じが吟声の間中しておりました。「振り仰ぐ瑞の反橋藤祭」の句意が天神様に届いたのではないかとふと思ったり致しました。

私は執筆の仕事の中で吟声のところが一番好きなのです。連衆の皆様がお作り下さった一句一句を味わい乍ら心を込めて吟じ上げる時気持のよい幸せを感じたことでした。

思えば忘れもしません、一昨年松山連句大会旅発ちの羽田空港で明雅先生から「次の執筆に」のお言葉、あまりの思いがけない事に即時「はいお引受け致します」とはとても御返事出来ませんでした。さあそれからは楽しさいっぱいである筈の旅行が素晴しい景色にふれても「ああどうしよう」と時々ふっと執筆のことが頭をよぎる有様で憂愁の気に覆われた二泊三日になってしまいました。さて旅も終り帰りのモノレールで折しも先輩執筆の秋元様、式田様と御一緒になり「実はこれこれ」と申し上げたら「是非おやりなさい私達が助けてあげるから」と暖かく励まして下さり不安ながらやっと勇気が湧いてまいりました。

さてそれからは執筆という重しを頭に乗せての半年余りでしたが、暑さも峠を越した八月下旬練習開始、プリントの説明を読んでは一動作又その繰り返しと毎日少しずつ練習、どうやら九月のリハーサルに臨むことが出来ました。何と言っても強力な助っ人は式田様に頂戴したビデオカセット、百聞は一見に如かずで再生のボタンを押しては納得、巻き戻しては練習と大いに助けられました。

初回深川の芭蕉忌の折は吾ながら初々しい気持で、二回め立机式の時はあまりの人の多さとお祝の熱気とで上り気味となってしまいました。それに引き替え今回の藤祭では淡々と自然体で運ぶことが出来ました。翌日着物の袖が文台袖の為に三角に折られていたのをほどいて元に戻した時「ああこれで済んだのだ」と一仕事終えた感慨がゆっくりと胸に拡がってきました。

もう十数年も前のことですが連句を始める以前大山の阿夫利神社で生まれて始めて正式俳諧を見学する機会を得てまるで夢の様な別世界と珍しくよそ事に思ったことでしたが、図らずも執筆という大役を三度もさせて頂きこの貴重な体験は私の人生の中で大きな財産となりました。

明雅先生、秋元様、式田様その他お世話下さった皆様に心から感謝申し上げます。有難うございました。

# 初習い「配硯役」顚末

岩井啓子

「はいけんやく？」

昨年の夏、正式俳諧で配硯役を務める件で、秋元さんからお電話をいただいたとき、耳で聞いた言葉からは、それが何をする役なのかわかりませんでした。

「お稽古をしますから、ご心配なく」の言葉に誘われて、「はい」と軽く受けてしまったものの、「お稽古をする」というからには、それだけの気配りがいるはず。簡単に考えてはいけなかったと、すぐ後悔しましたが、そのときはもう後の祭りです。

この冊子をお読みになる方の多くは、正式俳諧のことはもうよくご存知でしょうが、私が正式俳諧に接したのは、その年の春、亀戸天神の藤祭りで行われたもの一度きり。初めての目には、執筆の文台捌きがただ珍しく、あの座り方は「歌膝」というのだと先輩方から教えられ、歴史の勉強をした気分でおりました。

あのとき、そういえば整然と硯を運んでいた方々がいたけれど、あれは「配硯役」というのか……。ぼんやりした記憶をよみがえらせても、その役を自分が務める実感はわきません。それでも、一人ではなく三人一緒ですというところに気を強くして、その役を体験してみることにしたのでした。

お役は一年続きます。その秋と今春の二回、出番がありました。秋の芭蕉忌にそなえ、まず九月初めにお稽古を半日。全体のリハーサルのほか、配硯の手順を、この役は二度目という若尾よしえさんをリーダーに、橘文子さんと三人で特訓しました。

イメージとしては、茶会で抹茶を運ぶような役……と感じていたのですが、実際にやってみると、動きはもっと複雑です。硯の持ち方・置き方、歩き方といった細かな所作を覚えるほか、三人の動きを揃えるのが大変。ほかのお二人に比べ、私は御辞儀がおろそかなのか、一人タイミングがずれてしまうのが困りました。

半日だけの練習では心配とあって、よしえさんから、以前の正式俳諧を撮ったビデオを拝借。文子さんと一緒に、全体の流れと動きをおさらいしたりもしました。

そして本番――。最初の芭蕉忌では文字通り無我夢中。慣れない和服での正座に苦しんだこと以外は、ほとんど何も覚えていません。でも、二度目となった今春の藤祭りでは、硯を下げる前に執筆の吟声を趣深く聞く余裕がもてました。

肝心のお役目のほうは、二度目のときも、私の動きだけがずれたようでヒヤッとしたものの、後で、宗匠の式田さんはじめ一座の方々が「三人揃って、結構でした」と温かい言葉をかけてくださり、ほっと一息。初心の身にはあまる役で緊張もしましたが、終ってみると、見学しただけでは得られない充実感が懐かしく残ります。

雅かな文台捌きや朗々とした吟声を楽しむ正式俳諧には、茶室で湯の沸く音を聞くのに似た、味わいがあると思いました。

余談ですが、猫蓑会が正式俳諧を始めた頃に配硯役を務められた原田千町さんのお話では、配硯の手順は、当初と変えたところもあるそうです。一座する方がじっと待つ時間を少なくするよう、ムダな動きを省いて簡略にされた由。勉強にお借りしたビデオを見ると、撮られたときと現在では、配硯の手順以外にも少し違いがありました。

両方を比較すると、一つのセレモニーの型が出来上がる過程をたどるようで、これも面白い勉強になりました。

# 蓑虫

付勝練習二十韻

東明雅

蓑虫の音を聞に来よ艸の庵　芭蕉
初めて涼し掛けし濡縁　正雄
海岸線波頭真白に月ありて　千町
飛ぶやうに行くホバークラフト　遊

心太芥子きかせてすすり込み　淳子
制服脱いだ彼とくつろぐ　よしえ
さりげなくお守りだよと犬はりこ　元子
回教国は酒も御法度　和久
バザールに水煙草吸ふ男たち　良子
すこし疲れて美術館出る　正雄

見上ぐれば摩耶のあたりに雪しまく　鋭太郎
客待つ暖炉あかあかと燃え　達子
据ゑ膳は食はぬと言った嘘もばれ　志げ子
電算三課セクハラの罠　藍
ゴミ袋つつく不気味な烏たち　妙子
ちょいとそこまですててこの月　あかり

挙句については、「連句入門」に、「挙句は一巻の成就をよろこび、あっさりと詠むべきもので、哀傷めいた句はよろしくないし、また、発句にある文字を避け、字余りも嫌うのである。」とあるから、この趣旨に添うべきものであり、また、同書に「挙句はその前句にうまく付いていなくともよいと言われるが、その真意は、最後の一句になって、うまく付けようと考え込んでいては、一座の興がさめるから、巧拙を考えないで早く付けたがよいというのである。また、挙句は前もって考えておくものだと言われるのも、同じ理由からである」とあるけれど、これは興行中の一座においてのことであって、このように募吟して付け進めて行く場合は、各自十分の時間の余裕があるから、その時はやはり慎重に考慮して、前句の花によく合い、そして打越からは十分転じている句を治定すべきであろう。

それで①は前句の花（晩春）に対して、鳥帰る（仲春）は季戻りであり、また、打越の仔猫に対して、鳥は異生類であり、具合が悪い。②残る鴨（仲春）も同様である。③もろこ（三春）は季戻りではないが、これも異生類で打越を嫌う。④穴を出る地虫も蟇も仲春である上、虫という字が発句にあるからこれも嫌う。⑤かいやぐらは貝とは言え、蜃気楼のことだから、生類の打越にはならぬだろう。おもしろい句であるが、挙句としてはすこしおもしろすぎて、これでは花の句が引き立たない。⑥どんたくで祭（神祇）を出したのは手柄であるが音という字は発句にもあるから失格。⑦春の風邪（病体）は挙句に出すのはいかがであろ

やあいようはてな名前が出て来ない　達子
仔猫を抱いて満面の笑み　智子
花びらを糸に連ねて首飾り　秀子

二十句目

治定　軒にちらちら燃ゆるかげろふ　美和

1 晴れ渡りたる鳥帰る空
2 鴨が残りてたてしさざなみ
3 もろこの群れに動く遊心
4 地虫も蟇も穴を出る頃
5 かいやぐら立つ夢の如くに
6 どんたくの音響きくる街
7 くしゃみ三回春の風邪ひく
8 広野を下り光りゆく風
9 春の障子に映る人影
10 街に野山に春気充満
11 日永の縁に拡ぐ縫物
12 ペンを握れば軽き春愁
13 朧に滲む窓の灯火
14 膳の上には菜飯青饅
15 助手席に乗り長閑麗
16 遍路の鈴の遠ざかり行く
17 手紙をつけて放つ風船
18 やさしく笑ふ四方の山々

うか。⑧これはよい付味であると思うが、ナオの五句目あたりから戸外の景がずっと続き、ナウの二句目・三句目は内外不明の句であるが、挙句まではっきり外の景をするのにはちょっと躊躇させられた。⑨これは室内の句であるが人情他の句である。打越が人情他のアシライの句と考えるので、他の句ではまずい。⑪日永の縁に拡ぐ縫物、この句は内に入っており、人情自の句であるから、その点では難がない。ただ、前句に糸があって、この句に縫物があるのがやや気になるのである。⑫これも室内の自の句で、その点問題はないのであるけれども、春愁というような、湿った感情の句は挙句としては適しない。それは満尾を祝う和楽の気分にそぐわないからである。⑬これは室内の場の句だが、前句の何か陽気な気分とあまりにも離れすぎてはいないだろうか。付味が気になるのである。⑭これも室内・場の句であるが、食物の句はこの巻ウ一句目に心太があり、ことに膳という字はナオ三句目据ゑ膳があるので困る。膳という字を一巻の中、二度絶対に用いるなとは言わないが、やや目立つ文字であるから避けた方がよい。⑮助手席は一応室内であろう。下七の長閑麗がもすこし一工夫ほしかった。⑯挙句としては淋しすぎるし、⑰これは戸外の句であろうが挙句としては軽くておもしろいと思った。⑱は戸外であり、山はナオ一句に摩耶が出ている。治定の句は、本当に軽い句だが、それが打越・前句のはなやかさと対比され、おもしろいと思った。これで一巻満尾おめでたく、御協力ありがとうございました。

# 芦丈翁俳諧聞書（Ⅳ）

Nそれは、あの漣と漁業船じゃいけねえと言っても、いやそうは言っても、これはただニュースで聞いただけだからして、漁業船そのものがそこにねえからいいと、ナルホドと言わせる。まあちょっとした落し穴の一つのようなね、Hなるほど、ニュースを又耳に、これはそれでは、Nこれは自だね。又かいと、いやなこんだなあと、それから「埃拭うてまはす地球儀」と、これは家の中へ入るだね、地球儀で、それからしてその地球儀の埃をはらってまわすと、ほとそのまあ、地球儀のうちのね、エーどこであるとか、ここであるとかいう、その拿捕したことのまた朝鮮の海だとかいうような、それまでに穿鑿すると、近すぎるということになるけどもね、ただ埃を拭うてまわすきりといって、ただそれだけのことと深く穿鑿しない方がいいだ、こういう付けは、こりゃ自の句ですだ。

これがね、地球儀や何はただ、床の間の飾りものにしてね、エー埃もはらったことのないようなのを、埃をはらうという句で、これ、こういう句も珍しい句ですだ。それからして、そのはらうその人はというようなこと、「子等はみな都に住ませぢむさくと、Hその人の付けですね、Nこれはまあなんだね。この地球儀の埃をはらう人、その人だ。つまりね、エー、エー。

それから次はね、「土にほはせて早き物の芽」その場の付けだね。「花の道善の綱にも続きゐて」とこれはまあ、善の綱というから、いずれお寺かねえ、エーお堂のような所で、供養塔が建っている。そこへ、まあ、晒の布でなった縄をね、まあ、それに限ったことはねえが、そのお賽銭箱にね、その供養塔から引っぱって来てね、お賽銭箱に結び付けてあった。そんなのわし見たけどね、お賽銭投げてその善の綱に手をふれるだね、Hそうするとこれもその場、Nそう、その場だね。前句がまあお堂か寺の庭に物の芽が出てると、それから次が「巣こぼれ雀どこぞにか鳴く」と、雀の仔が巣からこぼれて、エー落ちたか、どこかに、チュウチュウといって鳴いていると、その堂か寺の付近にありそうなことだね、Hこれもその場ですね。Nええ、その場のできごと、まあできごとというが、その場になる、けど、この物の芽がまあ、畑なら畑でこっちはそれとは違う場所だでね、生物であり、ウンウン、それでね、この、なんだだ。植物があって、またこっちの方にエー、かりに道とか橋とかいうようなものになってくるとね、この地文、つまり地との関係はどうなると、これへすぐこれならいいけれど、またここへきたじゃいけねえから、こういうものを玉が転ばないというだ。順に転じて行かにゃならんやっ、転ばして行った玉がここでつかえると。

それで玉の転ぶという事で、最前も森山鳳羽先生の話をしたけれど、森山鳳羽先生はそれがまことにやかましかったんだ。それであの先生の連句を見ると、見事に気持よく玉が転んでいるですだ。森山鳳羽先生の話ちっとすりゃね、森山鳳羽先生はそのネ、京都の料理屋の出前持をしていて、それからそれが明治の維新の時でね、西郷だ木戸だという人たちが、もう新撰組に狙われていて、どうにも出て歩けない。木戸なんて人は縁の下に、そうまあ、あの松菊というその後奥さんになる芸者にかくまってもらって、縁の下にいて、食事はもらって喰べてたという程の、まあ、あぶないようになって来てからに、三条だの岩倉だのと

いう人に手紙やりたいけれど、なかなか難しくてやれない。それからその森山、出前持だもんだでね、それで出前を岡持さげて、それから手紙をもってお使いするだ。ハァそれは非常にその事で森山ちうのは役にたって、それが明治政府が出来てから何年たってだか知らんが、あの木戸やね大久保、西郷というような衆が、や、気なしでいたけれども、あの森山もまあ大変骨折っておらの為によかったが、あれも何とか役人に取りたてまいかと、そうだそうだちゅうわけで、さてそれじゃどうするだ、何がいい、ま、今、石川県知事が丁度ねえからして、石川県知事にしてやれちゅうわけで、出前持一やく石川県知事、まあ、その時分にゃ県令と言ったがね、ハァそうした所が石川県知事にした所が、出前持した程の人で、下の状態によく通じているからして、いやいい知事さんだちゅうわけで、こんないい知事さんをどこにもやらないでくれろちゅうわけで、石川県知事何年やったかね、よほど永くやったようで、それからして、あの勅選議員という制度の出来た時にね、第一着に勅選議員になる、勅選議員で一生暮しちまうがね、それでそれじゃ、その出前持でいて、誰に連句ならったかというとね、大阪の蟻兄という人に習っているだ。アリノアニという人、何かの集でその名御覧になった事あるかね。蟻兄にならったと、それで淀川をその舟で下ってはね、蟻兄の所で連句を習って、又、帰ってくると、それから或時にね、俺その句ちょっと忘れたけど、狐雨というね、狐の嫁入という、日のてらてらとしてからふる雨のことをね、狐雨という前句でね、それから最前の秋香の話じゃねえが、朝から晩かたまで付けたけど、どうしても付かない。それからして、お暇して出たところが、女持の小扇を拾ったちうだね。それからしてね、その時にゃまあ、ぬかるみであったかねえか、ま、前句が狐雨だからして自分で考えつらが、「女扇を拾ふぬかるみ」と付けて、どうしても付いているような気がすると思って、小帰りして、こういう句を、いま、こんな扇を拾ったから付けたったが、それから、うん女扇を拾ふぬかるみ、そりゃ、男扇だっていいじゃねえかと、それから蟻兄が直してくれたちうだ。「女扇を拾ふ軒下」と、そうすると狐雨が降って、それから軒下へ屋根下へかりて入って、それから女衆の事だて、ま、帯がゆるんでいるとかね、襟がどうしてるとかいうのをちょっと繕う、その拍子に挟んでいた扇をちょっと置いて、それから忘れて行ってしまったと、これも最前の話の明治時代の先生たちの付けに近いでしょう。ちょっと理窟があるでしょう。そういう付けをする。それはやがて本当の正風の芭蕉の考えてる正風にはちょっと遠いだ。明治時代の先生ちうものはね、ま、いくらかそういう風に小理窟のつけが時代の連句には多いですだ。Hなるほど。森山という人はそういう方ですか。ホウウとはどう書きますか、N鳳凰の羽、森山鳳羽、それをね、その当時森山鳳羽、渡辺其鳳ね、渡辺其鳳なんていうのは渡辺昇ね、あの会計検査院や何ややった子爵だ、これはおそろしく剣術の強い人で、それで新撰組でも渡辺だけは、どう付けて歩いても斬れなんだちうがね、強くて隙がなくて、それほどの人でね、それが大阪の府知事をしていて、そした所が、大阪政府という高張（提灯）を門の外へ二本立ててね、そして、その手前は殿様になった気になってるだ。そだで、内務省、内務大臣の大久保利通が内務大臣でいるのにその命令をちっとも聞かねえち

うだ。そんな事はいけねえちうだで、それから大久保はね、かなりな人間をまあつかわしちゃやるけど頑として聞かねえちうだね。俺が何も大阪を治めるから、内務省あたりいらねえ事言わなんでもいいちうわけで、それから渡辺邦武さんを今度はやるだね、渡辺邦武さんが二十代の頃で、そした所が前に行った連中がね、あんな若僧やったって何ならずちうわけで、笑ってたちうだね。それから行ってみた所が、やっぱり頑固にはねつけてる奴を、渡辺も若い元気でね、負けちゃいなんで、議論をやりからかすだ。そした所が、この若僧めちうわけで、椅子を離れて来て、襟首か何かつかんだちうだね。それから渡辺もきかねえで、とうとう二人で組みついて相撲だちうだ。それから属僚たちが来てね、止めるけれど、かまわなんどけ、この若僧が、こんな者がちうわけで、やるけれども、一方は若い元気だし、かた一方は年をひろってるもんだで、とうとう、しめえにはせっせと汗かくちうだね。それから、へ、そのうちに、ウン内務省にもこんな奴がいたかちうわけで、それじゃ俺のいう事を聞くかちうわけで、聞かにゃ離さねえぞちうで、とうとうその渡辺が説得したちうだ。そで、渡辺はその事が一つで、出世するでかい糸口になったちう逸話があるがね、其鳳という人はそういう人で、それで連句はなかなかうまいだ。

それからその頃ね、鳳羽、其鳳、鳥尾小弥太、これは得庵(?)と言いね、それから川口男爵というけど、これが梅谷かな、梅谷か梅渓だか、それから何だだ、中上川彦次郎なんて実業界の三井あたり三菱あたりの衆ね、こういう衆がね、慶応義塾に集って、慶応義塾の中にね、その連句をやるにはいいような、ま、庵のようなものがあったちうだね、それは何の福沢先生の奥さんがコキンという名でね、その連句やっただ、コキン女と古い錦の女と書くで、それでそういう連中が集って、それから駿河の蝸堂が捌きをしてね、蝸堂はそれで慶応義塾でそんな連中を相手にしてね、よほど得意な時代があるんだ。とうとう伊藤博文まで来たりしてね。それから伊藤博文のその何で宮中で行って連句をやった事がある。その連句はどうもね、つたわらないけども、ま、老人のいうにね、それは満尾しなんだけど、あとで満尾するちうことを言ったけど、まあまあ、これは宮中でやった仕事だで、ここでおくがいいと満尾しなかった連句があると、こんな事いったけどね、それはあのどうも伝わっていねえだ。そで伊藤博文だってね、この何だだ、あの山田だったかな、山田寒山という坊さんがね、姑蘇城外の鐘をね、小さい鐘をこせて頒布会や何やった寒山という、寒い山というね、その人と連句やったのがね、伊藤博文と、月ひとり秋や占めけん角田川という伊藤博文の句へね、山田寒山が、萩折り入れよ管絃の舟という脇付けてね、その巻、おら、どうも写しときゃよかったけどね、写しもしなんだ、そういう伊藤博文だって連句やっただし、そのね、慶応義塾でやったそのそういう連中のやった巻がいい巻だよ、蝸堂遺稿にゃのってるがね。

蝸堂ちうもんは連句がうまくてね、それはまあそのまことにうまいけれど、それでまあ何だね、蝸堂はまあ、ただ連句きりに遊んでいりゃいいに、それをね、いくらか商人屋に生まれているからして、油屋して損をしてみたりね、それから何だったな、何かやっちゃ失敗ばかりしていたなんて話があるがね、それから子供に恵まれなんで、子供に、で、ない児には泣かぬためしや秋

の風とかね、何とかいう句もあったりしてね、それから孫の徳太郎という者に最後かかるつもりのが、兵隊にとられてしまったりして、それで娘の嫁入った先で死ぬがね、それだで、その、そういう得意な時代がありながら、恵まれない一生を終ったが、その代り、連句七千巻やったちうだね、H七千巻はすごいですね、Nまあ、そんな巻数やった者は恐らく類例がねえと、他石さんが何を句集を作ったがね、「蝸堂遺稿」ちうもんを上下二冊、いい連句があるだ、どうも、この蝸堂は春湖に習ってるがね、春湖という者が、春湖・蒼山・契史、この衆の連句がまあ、あの時代でもこんな連句があるかと思うほどのすばらしい連句だね。Hあ、それは皆幕末の頃ですね、Nそうだ。まあ、幕末だね、H蒼山というのはいつかお話に聞いた駿河かどっかの人ですね。Nいや、越後の赤湯の人だだ。Hアオイ山と書く。Nウンアオイ山だ、蒼山ね、それでその蒼山はね、摩訶庵蒼山と言って京都にいて、それからして浜松にね、あそこに烏谷という、カラスのタニという人が、これも相当にいい人で、烏谷がもう老人になって、ここのおめたちの組では蒼山をよんで、蒼山をここに何して、蒼山に習えという、それからして、この衆に招かれて、そで蒼山は遠州に来て、遠州の見付だね、見付で一生終るですだ。一生終るちうけど五十ね五十幾つだよ。若くて死んでしまうだ、蒼山は文章もよくてね、引馬野の記なんいうものもあり、また、雲取日記という、春湖と二人でね、西国廻って歩いたりして、それで何だだ、春湖はね、蒼山や契史とやった、その時代のようなものが後には出来ねえだ。相手がねえだ。ほだからして、春湖自身は蒼山に決して劣っている人ではないけれど、今度は相手が劣ったものばかり相手にしているだで、ほだで、先に死んだ人が得していると、後へ残った者が損をしていると、そすると、わしから言えば、竹邨は早く死んでおれは後に残ったお陰に、竹邨とやったような巻は、それから後にはできねえと、あれは竹邨のおかげにできたぞと言われたってしょうがねえだ。（註、中村竹邨）。長生をして損をしたちうわけだ。Hなんほど、ここに出ている「下蔭」じゃない「山一重」ですか。Nそれやる時やなん、こういう事ですだ。その前にもまあやってってね、ちっとそのみっしりした巻を巻こうとそれからして何句も付けてしなんで、まあ、一句ずつじゃ何だか、まあ二句ずつにして、Hハァ、葉書に二句ずつ書いて、Nエエ自信のあるものを付けてやろうと、Hそれで相手がえらぶわけですか。Nエエまあ、その二句のうちをね、H一つとるわけですね、N取る句がなかったら、言いたい事はいうと、言いたい事はいうけど、喧嘩にならないように、あく迄も、自分たちのこしらえる巻をいい巻にこしらえようという一点に集中して、そしてやろうとするにゃ、どうしても一度あって約束しておくがいいちうわけで、それ前にはただ文通だけで、あっていないだ、H年頃は先生と同じ位？　Nわしよりね三つ四つ下だだ。それからして、それじゃ、おらほうから行くちうわけでね、わしんとこへ竹邨が来てね、そこで固い約束してね、たとえ、どんな批評を下そうとも、それは句の上の事で、喧嘩にはしないように、旧派の人ちうものは、ちょっとその何かいうと、それをきっかけに喧嘩するですだ。ウン喧嘩別れになる、そんな事じゃどうしてもだめだちうわけで、それでやったのがその「山一重」だだ。

（以下・次号）

## 二十韻五巻

### 余寒かな　式田和子　捌

武蔵野に古りし庵の余寒かな　鮎
梅の香りの中に繊月　和子
焙烙で雛のあられを煎りあげて　喜久
郵便やさん渡すDM　隆夫
夕立の去りたるあとの遊歩道　同
今日は逢へずに汚す白靴　鮎
ラブゲーム個人教授に念を入れ　久
ココの椅子に猫が丸まる　鮎
懸案の政治改革待った無し　夫
沈黙は罪除夜の鐘鳴り　鮎
初場所の話題若貴舞の海　夫
ポストきんさんぎんさんは誰　久
襞深き山より届く酒一斗　鮎
なかうど口に乗せられる秋　久
月明かり面差しの似ぬ嬰を抱き　夫
カラオケボックスしんと冷まじ　久
思ひ出が加速度つけてやってくる　鮎
鳶低空かます干すひと　夫
早咲きも遅咲きもあり花万朶　子
達磨に片目いれて絲遊　久

平成四年二月二十四日
於　四宮会

### 卒業子　中川　凡　捌

胸高に袴姿や卒業子　好敏
草履濡らして春の淡雪　遊
利茶用素焼の器一列に　凡
おまんじゅう好きおせんべい好き　遊
上映が決まりてうれし夢映画　良輔
下り簗背に立ちし美少女　敏
君の手をはじめて握る月の夜　輔
ケルンの紅葉独り踏みしめ　みどり
異国でも不自由しない味噌醤油　貴美子
笛吹き薬罐ぴいと鳴ってる　遊
行水をせがむ風情の九官鳥　り
願掛けしつつ撫でる白蛇　敏
髪ほどきチークタイムに踊り出す　り
どうすりゃいいの下戸のあの方　子
隣人の朝の読経に夢覚まし　り
厳寒の田に凄まじき月　遊
ストレスを貯めて大きな胃潰瘍　輔
健康ランド女同士で　子
花吹雪追ひかける児にじゃれる猫　凡
鶴さん亀さん蝶と遊びぬ　庄一

平成四年三月二十三日
於　四宮会

### 門入るや　原田千町　捌

門入るやまづ緑立つ「一つ松」　千町
鳥もおぼろの影を置く池　登代子
しゃぼん玉父親と子の語らひに　美恵子
星型に抜くクッキーの山　はるみ
濡れ髪で佇つベランダに赤き月　登
羅の胸隠せない愛　美
本棚の本の裏より文の束　登
投資勧誘電話相次ぐ　美
名犬と喜怒哀楽を共にして　は
シュプール消えし深きクレバス　千
ユングフラウ教会の鐘鳴り冴ゆる　登
とぐろ巻いてる居酒屋の隅　は
新蕎麦を打つが生きがひ定年後　美
恋にやつれて夜なべする女　は
月明に白き裸身を曝しあひ　登
この世紀末唯楽の刻　千
粗大塵芥に交じりて二宮金次郎　美
宅配便で受ける賞品　同
誘ひ合ひ花の寺へと繰り出す　登
水かげろふの遊ぶ天井　は

平成四年三月十二日
於　小石川後楽園涵徳亭

## 黙阿弥祭　鈴木　茂　捌

東風なぶる黙阿弥祭の幟かな　明雅
名残の雪に急ぐ人波　秀樹
水芭蕉山の子供の案内して　美恵
欠けた茶碗に色だけのお茶　寿子
えびせんを後引くままに食べつくす　樹
籐いすに凭り月の出を待ち　英子
恋知らぬ働き蟻は一列に　恵
男女同権セクハラの罠　雅
ニューハーフ美しすぎて妬まれて　樹
人喰ひ鮫にやられたらいい　英
冬の夜に自分の影と行き違ふ　寿
お布施も墓地もみんな値上り　恵
古郷にのこる藁屋根赤蜻蛉　雅
芋煮の会で酌みし猿酒　寿
肩寄せて月光浴びるそぞろ寒　樹
おかまひなしに燃ゆる焔よ　英
ゴーギャンのタヒチの女逞しく　雅
捨てられしまま遊ぶ仔犬ら　恵
ひもすがら読書三昧花明り　茂
遠く聞こゆる春の歌声　寿

平成四年三月十九日
於　電通南寮

## 厩出し　田村満子　捌

厩出しの誘ひに若さ集ひけり　好敏
角ぐむ蘆にせせらぎの音　満子
オレンジの滴るつゆを拭き取りて　泰子
まづ小物から掛けるアイロン　敏
夏足袋の白さ際立つ月あかり　満
祭りの夜の唇の味　泰
鞭打って縛って欲しき昂ぶりに　敏
ゼンマイ時計いつか止まりし　満
宇宙より今様浦島生還す　泰
山好きは山海好きは海　敏
落鮎を肴に独りかっぽ酒　満
月の影射す鴨居黒々　泰
表装はパールトーンで二科展へ　敏
ソフトスーツの着こなしも良く　泰
夕霧忌契りの床に乱れ髪　敏
肩書きとれて留守番に慣れ　満
あやとりを祖母に教はる姉妹　泰
幾何学的なマズルカの曲　敏
風に揺れ地にも届かん枝垂れ花　満
蜂の巣箱を置きし畑中　泰

平成四年三月二十七日
於　鎌倉　おうめ様

### ☆新刊紹介☆

連句
猫蓑作品集Ⅱ

平成二年十一月から平成三年十一月まで猫蓑及びその周辺の連衆によって作られた、歌仙三十一巻、二十韻五十四巻、そして籬一巻を収める。

内容は各人捌きの外に、膝送り、文音など、バラエティーに富み、昨年の「猫蓑作品集Ⅰ」を上回る参加数の上、質的にも向上の跡が顕著である。作品の製作および鑑賞の良き参考資料となるであろう。

発行　平成四年三月吉日
定価　一、七〇〇円
御希望の方は
〒277 柏市加賀2-12-11
梅田利子方
（0471・72・8119）

# 手賀沼連句会

二十韻　八巻

平成四年三月二十九日
於　手賀沼フィッシングセンター

## 手賀沼張行記

明雅先生の喜寿の祝いを手賀沼の辺りフィッシングセンターを会場として、三月二十九日に先生ご夫妻にお出願うことになったのである。信州大学の同僚であられ、現在筑波大学教授の加藤慶二先生、愛弟子の富山大学助教授の二村文人先生もお出で下さり、当日の出席者は四十四名の顔ぶれとなった。

十二時より中川哲氏のご挨拶により開会、続いて慶二先生よりご祝辞を頂く。続いては永年の友杉内徒司氏が、先生の著書についての期待を述べられる。ここで猫蓑会から先生には花束を、奥様には真珠のブローチを贈らせて頂いたが、新宗匠羅浮亭正江・桃径庵和子両氏より受けられたご夫妻は誠に照れ臭そう。乾杯の音頭は文人先生。

十二時半より記念の二十韻、十六時十分より夫々満尾となった八編の作品の披講となったが、どの作品も変化球の多い付句の面白さに嘆声しきり、楽しませて頂いた一日であった。（八木清子）

## 祝明雅先生喜寿　秋元正江捌

初蝶のきてとまりけり俳諧師　正江
北の国にも柳絮とぶ頃　文人
春炬燵旅のプランの想練りて　郁子
玉露の香り口にいっぱい　さとる
手賀沼の網笠照らして月昇る　千雪
動物病院やや寒の猫　正秋
御命講太鼓に紛れ寄り添ひし　郁
恋の確認急ぎファックス　秋
スト解除たどり着くなりすぐ退社　人
ごじから男麦酒こぼしつ　る
こしひかりつんつんたちて炊き上り　同
牢屋暮しにつき果てぬ夢　秋
安タバコ自髪の混じる革命家　人
浅間噴煙雲と消えゆく　郁
冬の月与謝野晶子は子沢山　秋
蒲団にくるむ小さきいさかひ　人
合奏の人エチュードを和やかに　郁
倫敦塔をはるか眺める　雪
寿今年も花の便りきぬ　る
尾を曳く雉の姿よろしき　雪

## 青き踏む　市野沢弘子捌

沼よりの声さまざまや青き踏む　弘子
遠く近くに睦む春禽　雅代
せがまれて絵凧教室開くらん　好敏
販売機よりミルクコーヒー　澄子
ゲレンデのシュプール照らす月円く　達子
彼と揃ひに編みし手袋　冨美
何事もわたし無しでは駄目なひと　代
お帰りチャイム歌ふむく犬　達
遊泳の果ての飛行士泣き笑ひ　澄
鯖の押し鮨俺の好物　敏
夏霧の籠めて赤穂の城の趾　代
清十郎の墓もある寺　澄
嫋々と口説きのあとは責め通し　代
ぞろぞろ産ます似たる鬼の子　敏
後の月山里は皆寝しづまり　澄
マッシュルームの出荷手伝ふ　美
ファックスにやうやく慣れし姉妹　達
胃は重くても酒は別もの　敏
はるばると集ひて喜寿の花の宴　弘
とばす風船仰ぎうららか　美

## 水温む

内田　麻子　捌

手賀沼の水も温むや師を囲む　麻子
岸のあたりに青む芽柳　千町
墨の香もしるく大凧仕上がりて　健悟
あっと無くなる煎餅の山　美津
月(ウ)の膳待ちかね子等のはしゃぐ声　シズ
鍔糸抜き秋袷着る　秋景
刑満期捨てし女と萩の道　悟
髪かき上ぐる癖もかはらず　津
イグアナを見に行く旅のガラパゴス　町
塩をなめつつ仙人掌の酒　ズ
虹(ナオ)二重布施弁天にかかりたる　景
鎌の月出てかはほりの飛ぶ　悟
ここだけの話を壁が聞いて居り　ズ
性転換で兄が姉上　町
ほろほろと真珠の涙こぼれたる　悟
ラッセル車ゆく谷間の里　麻
炉(ナウ)明りに賢治の童話しみじみと　景
停年なほも夢を追ひつつ　町
神楽殿謡ひ朗々花吹雪　津
日がな一日とべる姫蜂　ズ

## 喜の祝

式田　和子　捌

寄り添ひて風蝶一路喜の祝　和子
宴の館かほる紅梅　あかり
汐干籠重さとりどり比ぶらん　啓子
ネッカチーフを愛犬の首　哲
月(ウ)射しぬ魔笛CD低くして　一恵
逢へない女を思ふ露寒　啓
文化祭本番のキスつひ本気　恵
溢れんばかりぐい呑みの酒　り
世界中選挙の年に与党負け　哲
ラッセル車出てやっと山越え　り
鷹匠(ナオ)の秘技を口伝で伝へられ　啓
からかさ小僧遊ぶ縁側　り
靴下のたるみ三浪長過ぎて　哲
沸かす珈琲つまむかりんと　り
河鹿鳴く宿の睦言尽きず月　哲
ソフトタッチにはづす陶枕　恵
下り坂(ナウ)モンマルトルの甃　哲
経でも読むか寺に育ちて　恵
ひとひらを文箱に納め花惜しむ　啓
東をどりの桟敷満員　恵

## 花三分

下鉢　清子　捌

祝明雅先生喜寿
俳諧師迎ふる手賀や花三分　清子
声にぎやかに群るる子雀　冬乃
春暖炉クレヨンの色選びゐて　やす子
こっそりつまむ罐のクッキー　庸子
夕(ウ)立の後に昇りし丸い月　利子
日焼の肌に誘ひ込まるる　水壺
神かけて貴男大切電話口　乃
発掘壁画すでに剥落　清
絹の道庫車(くちゃ)へ着くころくたくたに　利
駱駝の瘤に一斗酒積む　壺
占(ナオ)ひのトランプ果てず寒昴　利
絵画き恥掻きサイケデリック　同
墨象の喜の字くづしの袋帯　壺
真珠贈って釣り上げた妻　庸
寄り添ひぬ月がとってもナウだから　や
がちゃがちゃひとついつか鳴き止む　乃
簗守(ナウ)りの老いてしはぶる氷頭鱠　利
追ひかけごっこ鬼が転びぬ　庸
清明の松竹梅の弥栄に　壺
こころのどかに歌ふ祝ぎ唄　乃

# 石割の花

鈴木千恵子 捌

石割の花も言祝ぐ喜の字かな　千恵子
一直線に翔びし燕　徒司
夏近し窓のカーテン取り替へて　久美子
甘味ほどよきケーキ手作り　和代
雪卸(ウ)誰も気付かぬ昼の月　正敬
うはさの主は嘘し続け　美
縁結びアフターサービス抜きの神　敬
襲名興行梅玉福助　代
宇宙船忘れた頃に生還し　美
柱時計の間のびして鳴る　代
ハンモック(ナオ)揺らしつ大金摑む夢　美
酒の等級消ゆるお達し　司
ストリッパー採否はバスト脚線美　敬
さりげなく言ふ「好き」が身に入む　美
吊尾根の二峰に赤き月の雲　慶二
新米炊いておむすびにする　司
鬼知らぬ(ナウ)子供等がする鬼ごっこ　代
桧原村は東京都なり　美
げんげ田に寝ころび歌を口づさむ　同
道ゆく人の陽炎ひて見ゆ　代

# 自祝喜寿

中島 啓世 捌

根分などしてはや喜寿になりにけり　明雅
鷹鳩と化し輝ける空　淳子
春火鉢石庭の苔眺むらん　慶二
幼な器用に遊ぶお手玉　路子
寒月(ウ)にチャペルのクルス浮び出で　智恵
ただ逢ひたくて白息の坂　啓世
空港の熱い抱擁見いちゃった　淳
雲水は笠ゆっくりと脱ぎ　二
パンタレイロシヤに変るソ聯邦　雅
人喰鮫を豚肉で釣る　二
さなぶりに(ナオ)母が自慢の手打蕎麦　路
泡盛片手語る夜の秋　二
せせらぎがふと近くなる山の月　同
お師匠さんは女かまきり　雅
薄き膝そっとまくらにそぞろ寒　恵
パスポート見せ年がばれたる　淳
死神を(ナウ)追ひ返しつつ生きのびて　路
運河に立てる黒きさざ波　淳
我孫子には直哉の旧居花三分　世
かへり見すれば光る逃げ水　恵

# 龍天に

福井 隆秀 捌

龍天に昇るがごとく喜寿迎ふ　隆秀
岸に芦かび角ぐめる頃　元子
子のためにお玉杓子の網買ひて　遊
読みさしの本置きし厨辺　文子
月の影(ウ)ほのぼのと浮く窓に倚り　光子
忍び逢ひしは初鴨の園　よしえ
威銃森番の背ヵ逞ましき　元
ドンペリニョンルームサービス　遊
深呼吸回転ドアーに踏み入るる　文
二時間待たせじらす診療　光
竹山の津軽三味線(ナオ)冬の旅　同
雪はしまきてしづもれる里　元
黒猫の金と銀との片目づつ　遊
藍の浴衣の少しはだけて　元
苦き恋荒ぶる神輿月に舁く　え
五輪選手の達引の技　遊
西東グルメ(ナウ)の老舗列をなし　文
ジグソーパズル嵌める放課後　光
幻の花求めなむ大き夢　文
遅日の縁に糸つむぐ母　え

## 連句会案内

※連句教室

日　時　第一日曜日　午後一時～五時

会　場　江東芭蕉記念館
江東区常盤一－六－三
（電）三六三一－一四四八

※柏連句会

日　時　第二日曜日　午後一時～五時

会　場　光ケ丘近隣センター
（南柏駅よりバス　光ケ丘団地マーケット下車）

※A・C・C連句・理論と実作

日　時　第二・四土曜
午前十時～十二時

会　場　新宿住友ビル四十八階
朝日カルチャーセンター
（電）三三四四－一九四一（代表）

※猫蓑会（会員制）年四回
（一月・四月・七月・十月　第三水曜日）

会　場　江東芭蕉記念館
江東区常盤一－六－三
（電）三六三一－一四四八

## 雁帛往来

▽三月一日　関口連句教室　十四名出席、隆秀・清子捌。二卓。

▽三月十一日　A・C・C、終って大畑健治氏と逢う。「俳文学大辞典」執筆について相談。

▽三月十六日　井本農一氏傘寿記念祝賀会、東京会館に出席。

▽三月十九日　電通連句部、電通南寮にて興行。

▽三月二十三日　俳句文学館で草間時彦・平井照敏の両氏と三吟、大雪になり驚く。

▽三月二十五日　A・C・C

▽三月二十九日　喜寿の祝賀会、手賀沼フィッシング・センターで挙行。二十韻八卓。六時ごろ帰宅。

▽三月三十日　京成常盤平の桜を見に行く。

▽四月二日　千鳥ケ淵の桜を見る。

▽四月三日　江戸川親水公園の桜を見る。

▽四月五日　関口連句教室、十四名出席。文人・水壺・弘子・千町捌

▽四月八日　山梨県の神代桜・神田桜（じんでん）を見る

▽四月十一日　A・C・C、今期より土曜午前中と変る。受講者四十二名。

▽四月十六日　電通連句部、南寮で興行。

▽四月十九日　柏連句会、三卓　譲介・健悟・よしえ捌。

▽四月二十二日　角館の枝垂桜を見、翌日は盛岡の石割桜を見る。満開にて感激。

▽四月二十五日　A・C・C

▽四月二十六日　亀戸天神藤祭り。正式俳諧興行、二十韻八卓。


**季刊「連句」　第三十七号**
平成四年六月一日発行
編集人　東　明　雅
発行人　東　明　雅

季刊「連句」発行所
〒277 柏市つくしが丘二ノ二ノ一二　東方
電話　〇四七一（七五）一一九二
振替口座　東京七－五二一三三

印刷所　株式会社　岩田印刷
〒277 千葉県柏市酒井根六二六－一
電話　〇四七一（七四）〇一八三

定価　一部　五〇〇円　送共
一年　二〇〇〇円　送共

# 連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

連句の実作・鑑賞・研究に必須の知識をすべて網羅！初心者から研究者まで使える本邦初の連句辞典

B6判　三五二頁　三五〇〇円

三版

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである

**収録項目例**

〈用語篇〉挙句　会釈　一座一句　有心　打越　思いなし　表八句　懐紙　歌仙　軽み　切字　景気　五句目　差合　去　式目　四春八木

〈人名篇〉天野雨山　伊藤松宇　上田聴秋　鵜沢四丁　小林見外　下平可都三　関為山　高橋玄一郎　高浜虚子　中村俊定　野村牛耳

---

水原秋桜子編

## 俳句鑑賞辞典　二三〇〇円

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編

## 現代俳句鑑賞辞典　二八〇〇円

結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編

## 季語辞典　二八〇〇円

日本の季節にまつわる言葉をスモッグ・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修

## 難解季語辞典　四五〇〇円

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

---

**国語学大辞典**　国語学会編　B5一九〇〇〇円

**国語慣用句大辞典**　白石大二編　A5六八〇〇円

**国語慣用句辞典**　白石大二編　B6二二〇〇円

**国語史辞典**　林巨樹他編　B6三五〇〇円

**日本語語源辞典**　堀井令以知編　B6一八〇〇円

**京都語辞典**　井之口・堀井編　B6一八〇〇円

**擬音語擬態語辞典**　天沼寧編　B6三五〇〇円

**隠語辞典**　樸垣実編　B6三八〇〇円

**近世上方語辞典**　前田勇編　A5一五〇〇〇円

**花柳風俗語辞典**　藤井宗哲編　B6二三〇〇円

**明治大正新語俗語辞典**　樺島忠夫他編　B6三八〇〇円

**難訓辞典**　中山泰昌編　B5三二〇〇円

**名乗辞典**　荒木良造編　B6二八〇〇円

**名数数詞辞典**　森睦彦編　B6四五〇〇円

**あいさつ語辞典**　奥山益朗編　B6一八〇〇円

**新版ことば遊び辞典**　鈴木棠三編　B6五八〇〇円

**類語辞典**　鈴木・広田編　B6二八〇〇円

**類義語辞典**　徳川・宮島編　B6二三〇〇円

**表現類語辞典**　藤原与一他編　B6四八〇〇円

**新版文章表現辞典**　神鳥・村松編　B6二九〇〇円

---

東京堂出版　101東京都千代田区神田錦町3-7　電話03—233—3741～2